

いいづな学園グリーン・ヒルズ小学校5学年・6学年

当たり前ってなんだ!?

いいづな学園グリーン・ヒルズ小学校の5・6年生は、「平等な機会にアクセスできることは人類に豊かさをもたらす」というセントラルアイデアのもと、権利や平等に関するさまざまな社会課題を探究し、「当たり前を疑う」という視点から学びを深めてきました。

子どもの権利からはじまった問い

4月、児童たちは「子どもの権利条約」を学び、学級として大切にしたい権利を話し合いました。「差別されない権利」「意見を言う権利」「休む権利」の3つを選び、「きずなの森」という学級憲章を定めました。しかし、形だけにとどまりがちな宣言にとどまらず、権利を行使するには責任が伴うことにも気づき、より深い学びの必要性を感じるようになりました。

「当たり前を疑う」視点の広がり

新聞記事を通して、障害のある方、女性、日本で暮らす外国人労働者など、社会的に不利な立場に置かれやすい人々の存在を知りました。自分たちが享受している「当たり前」が、他の人にとってはそうではないことに気づき、「当たり前を疑う」という探究のキーワードが生まれました。

パラアスリートとの出会いから学ぶ

スポーツが大好きなクラスの特性を生かし、児童たちはパリパラリンピックに出場予定のアスリート一人ひとりに注目し、新聞から得た情報をもとに紹介記事を執筆。さらに、実際に選手に手紙を書き、8人中3人から返事をもらうという「本物とのつながり」を体験しました。なかでも、ブラインドサッカーの平林太一選手との対面と体験活動は、視覚障害者の生活への理解を深め、自分たちの日常を見直す貴重なきっかけとなりました。

ジェンダーと平等の「概念」に迫る

学期末には、「ジェンダー」や「平等」という言葉が新聞記事に頻繁に登場することに気づき、そこから夫婦別姓や同性婚、スポーツ実況の男女比といったテーマに関心を広げていきました。「結婚とは何か」という問いにも取り組み、普段意識しない社会の仕組みや価値観を「概念」として捉える力を養いました。

持続可能な社会の担い手として

1年間にわたる探究を通して、児童たちは、自分たちの「当たり前」を疑うことが、他者への理解や社会の仕組みへの気づきにつながることを実感しました。今後も、身近な疑問から社会の課題へとつなげて考え、行動する力を育んでいきます。